

2009 年度春学期

学生の授業評価に対する分析結果

1 現代英語学科

英語英米文化コース

英語アメリカ文化コース

英語イギリス文化コース

1. 語学科目

昨年度の課題は次の 2 点であった。

(1) 同一科目担当者間による連絡

(2) 同一スキル科目のレベルの調整

Grammar ・ 、 、 については以下の 4 点について担当者間で調整しながら授業を行ったので、課題の(1)については解決できた。しかし、()の後の評価についてはクラス間でばらつきがあった。それは Grammar ・ については担当者の許容範囲の部分の評価による。

() 授業進度

() 授業およびテキストについて学生の理解度の確認

() 各種小テストおよび課題

() 期末試験

Reading ・ については同一テキストで授業を行ったが、授業進度がかなり違う結果となった。

日本人教員の担当した Composition ・ ・ ・ 、それぞれテキストを共通に実施した。授業評価アンケートに付けられた学生のコメントを参考にしながら次年度の検討を行いたい。

Conversation ~ は統一テキストで学期末に面接試験を実施した。

いずれの科目も学年が上がるとレベルが上がるようになるのだが、上記(2)の課題が残っている。

語学科目について全体的な評価を見ると、問 1 「私は、自主的かつ意欲的に取り組んでこの授業を受けた」で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計が 77.9% である。担当者の授業に対する問 3 ~ 問 8 についてはそれぞれ 75.6%、76.4%、74.9%、72.9%、75.7%、80.5% であった。授業担当者の熱意は 80.5% で、この数字は落としたくない。全体的に見ての評価は 72.2% が満足できる答えをしており、その結果 68.9% が学習意欲を喚起されたと答えている。しかし、その反面、「どちらともいえない」という答えも 19% ~ 23% あり、課題も残している。語学科目の評価が高いのに比べ、専門科目の評価が下がっている点が気になることである。

問 1 「私は、自主的かつ意欲的に取り組んでこの授業を受けた」

	1~2 (肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5 (否定的)
--	-----------	--------------	-----------

語学	77.9%	17.4%	4.7%
----	-------	-------	------

問3「シラバスは、授業の目標や計画、授業の評価方法を適切に示していた。」

	1~2(肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5(否定的)
語学	75.6%	18.4%	6%

問4「授業は目標達成のため計画的に進められた」

	1~2(肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5(否定的)
語学	67.4%	17.8%	5.8%

問5「授業担当者の教え方は適切だった」

	1~2(肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5(否定的)
語学	74.9%	17.8%	5.8%

問6「授業の内容はわかりやすかった」

	1~2(肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5(否定的)
語学	72.9%	15.9%	9.2%

問7「授業の進度は適切だった」

	1~2(肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5(否定的)
語学	75.7%	15.1%	9.1%

問8「授業担当者の授業に対する熱意を感じた」

	1~2(肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5(否定的)
語学	80.5%	12.9%	6.6%

問11「私は、この授業によって学習意欲が喚起された」

	1~2(肯定的)	3(どちらともいえない)	4~5(否定的)
語学	68.9%	22.5%	8.9%

問12「総合的にみて、この授業は私にとって満足できるものであった」

	1～2 (肯定的)	3(どちらともいえない)	4～5 (否定的)
語学	72.2%	18.9%	8.7%

2. 専門科目

専門科目については2年・3年(英米文化コース)と4年(英語アメリカ文化コース・英語イギリス文化コース)とで回答の分布が若干異なる。

問1「私は、自主的かつ意欲的に取り組んでこの授業を受けた」

	1～2 (肯定的)	3(どちらともいえない)	4～5 (否定的)
英米コース(2・3年)	66.6%	31.0%	9.8%
アメリカ(4年)	65.7%	15.6%	19.8%
イギリス(4年)	66.6%	31.1%	2.2%

問11「私は、この授業によって学習意欲が喚起された」

	1～2 (肯定的)	3(どちらともいえない)	4～5 (否定的)
英米コース(2・3年)	54.1%	30.6%	15.3%
アメリカ(4年)	52.6%	21.6%	15.8%
イギリス(4年)	55.6%	31.11%	13.4%

問12「総合的にみて、この授業は私にとって満足できるものであった」

	1～2 (肯定的)	3(どちらともいえない)	4～5 (否定的)
英米コース(2・3年)	60.2%	23.2%	16.6%
アメリカ(4年)	54.8%	20.0%	15.2%
イギリス(4年)	66.7%	17.8%	15.6%

現代英語学科1年 TOEIC Bridge 結果(全体平均と入試種別)

	2009年6月実施(98点 174点)			2009年12月実施(114点 168点)		
	Listening	Reading	Total	Listening	Reading	Total
全体	66.9	70.3	137.3	70.9	70.3	141.3
AO	67.8	69.5	137.3	70.5	67.7	138.2
スカラ	72.4	78.5	150.9	74.4	77.8	152.2
センター	66.1	71.1	137.3	72.2	70.5	142.7
一般	63.5	71.6	135.1	69.8	72.0	141.8
指定校	65.6	63.8	129.3	69.6	65.7	135.3

Listeningの伸びは見受けられる。

TOEIC と TOEIC Bridge の点数の比較

Bridge	90	100	110	120	130	140	150	160
TOEIC	230	260	280	310	345	395	470	570

英語コース TOEIC スコア比較

	2008 年 12 月実施	2009 年 12 月実施
2 年	380.9 点 (受験者数 : 39) 220 点 650 点	350 点 (受験者数 : 2) 235 点 465 点
3 年	347 点 (受験者数 : 5) 280 点 420 点	655 点 (受験者数 : 6) 440 点 755 点
4 年	458.4 点 (受験者数 : 37) 290 点 765 点	479.2 点 (受験者数 : 18) 245 点 815 点

2 ドイツ語ドイツ文化コース

1. ドイツ語コース全体の集計（ドイツ語語学科目、コース科目）を見ると、「問2：シラバスについての質問」に対して、「どちらともいえない」を含めると、半数以上がシラバスを理解していないと思われる結果が出ている。シラバスの利用が徹底されていないのが現状である。学生はシラバスを読まず、勉強の準備もしていない。
2. 語学科目の評価よりも、コース科目の評価のほうが総じて高い。学生の満足度を示す項目（問5～問9、問11～問12）では、すべて80パーセント以上の学生が、1. そう思う、2. どちらかといえばそう思う を選んでいる。
3. 不合格科目がある学生は、必ず再履修することを徹底させるべきである。語学科目で力の差がありすぎると、授業の運営が困難である。また授業評価が低くなる原因にもなる。
4. 同じ学年でもドイツ語力に差がある。現在の1年生からはこの課題に対応するカリキュラムとなっているが、3, 4年生にはどのような対策をとるか、学生数などを考慮して対応する必要がある。
5. 「授業評価アンケート」は、すべての科目について行う必要はないのではないか。学期ごとに一定数の科目を選びアンケートを実施することでも、傾向と問題は明らかになるのではないか。
6. 授業に熱心に出ていない学生が、アンケートでマイナス評価を出す傾向がある。アンケートで出た結果をどのように評価するのか、出てきた数字だけでは十分に把握しきれない点がある。

3 フランス語フランス文化コース

. フランス語教育全般について

一部にネガティブな回答があるものの、全体的には順調にいと判断する。

問によっては、回答をどう評価したものが、判断に苦しむケースもある。以下、この点についてコメントする。

. アンケートの設問に対するコメント

問2 について

「シラバスを読んだか？」に対する答えは「はい」と「いいえ」の二者択一にすべきではないか？ 「どちらともいえない」はありえない。

問3 について

問2で「はい」と答えた者のみが回答すべきだろう。

シラバスを読まなかったが教員の説明は聞いたというケースも考えられるが、設問の仕方自体を再検討すべきと思う。

問10 について

これも、問2で「はい」と答えた者のみが回答すべきだろう。シラバスを読んでいない者に答えることはできないはずである。

また、問10は、学生自身の自己評価ととらえるべきはないか？

授業のレベルが高ければ、学生の目標到達率は下がるかも知れない。

また、学生自身が設定した目標値が高ければ、主観的には結果に不満が残るかも知れない。

問12 について

問10とも重複するが、学生自身が設定した目標値が高ければ、結果に不満が残るかも知れない。

さらにまた、学生自身が 教師から見てどう評価するかは別にして 勉強「不足」を反省し、不満を感じることもないとはいえない。

すべての設問について

「どちらともいえない」という選択肢は排除すべきではないか。「思考停止」を是認することにしかないだろう。「よい」「わるい」をはっきり示すようしむけること 意志表示・意見表示の訓練でもある も、教育上必要と考える。

4 スペイン語スペイン文化コース

2009 年度春学期には、コース生、2 年次から 4 年次まで、合計 19 名が授業を受けておりました（在籍者合計 24 名、そのうち 3 年次学生 4 名が留学と 1 名休学）。

コース科目・語学科目両方に言えることですが、教員の態度や教え方に関する評価は「そう思う」「どちらかというと思う」の二つで 80%以上あり、概ね順調といえます。

しかし「受講者自身の取り組みに関する質問」で、自主的に意欲的に授業に取り組んでいない学生がかなりいることがはっきりとわかります。そのことを学生自ら自覚しているのは救いですが、解決方法を検討せざるを得ません。

一部の学生が意欲的に取り組んでいないという理由は、それらの学生の授業に対するモチベーションの低さと遅刻・欠席に対する学生自身の甘さによるのではないかと思います。実は現在の三年次に能力的には問題のないはずの数名の学生が、学友会・クラブ活動・アルバイト等に熱心になりすぎて勉学に真剣に取り組まなかったため、学力不足に陥り、学年にふさわしい内容の授業についていけなくなっている者がいます。これらの学生に対してきめ細かい対応で個人的に語学力をつけさせ、モチベーションをあげていく必要があります。まずは遅刻・欠席をしないよう厳しく指導することから始める必要があると思います。来年度は卒業がかかるので、本人たちの意識も変わることを期待しつつ、自らの責任で時間を守り、語学力を身につけていくよう仕向けていきたいと考えております。

5 中国語中国文化コース

概ね学生は意欲的に授業に望み、所定の成果をあげることが出来たと言える。

中国や中国語に対する関心も持っている学生が多い。

楽しく勉強できたというコメントも多い。

難しいがやりがいがあると感じている学生もいる。またある程度の難度のある文章を読む必要もある。

もっと板書をして欲しいという要望のある科目もあったので、今後は留意したい。

いくつかの授業で学生の力の差が問題となっているが、今年から第 2 外国語で学ぶ学生と専修言語で学ぶ学生が混在しているので、上位グループと下位グループに分かれてしまい、授業しづらいのは事実である。解決策として一部の授業ではクラス分けも検討している。

すべて中国語を使う授業で、日本語による解説を望む声があったが、これはやはり中国語だけで行うべきだと判断された。

パソコンを用いてずっと授業をしてきた中で、今年が一番歓迎されていて効果が上がった。何度でも聞きたい音声を聞ける他、自宅からでも学習できる点がよいとされる。今後は携帯電話等のモバイル学習教材開発に力を入れたい。

6 韓国語専修

1. 人数：

韓国や韓国語に対する関心が高まり受講している学生が多かった。しかし、発音など日本語にはない文法事項や表記する際と実際発音される時の発音が異なるため戸惑いを覚えている学生も数名いた。また、1クラスで30-40人ぐらいを超す授業形態になったため本来外国語の授業(10~15名)が行われにくい状況になっていた。

2. 授業の構成：

毎回ミニテストや復習を兼ねて講義を行ったが専修言語で学ぶ学生と第2外国語で学ぶ学生が一緒になるため、上位グループと下位グループに分かれてしまい授業の構成が難しくなった。解決策として一部の授業ではクラス分けも検討している。

3. 学生のモチベーション：

授業に熱心に出ていない学生が、アンケートでマイナス評価を出す傾向がある。アンケートで出た結果をどのように評価するのか、出てきた数字だけでは十分に把握しきれない点がある。

7 日本語日本文化コース、日本語教員養成

< 語学 >

各設問で「3」「4」「5」を回答した学生が 20 名前後いる。これらの学生は消極的に、或いは積極的に否定的な評価を下したと言えるだろう。全体からみれば 5%弱であるが（503 名が回答）、不満を感じる学生が 20 名に及ぶことは見過ごせない。

専任教員の「授業評価アンケート結果に対するコメント」を統合すると、以下の 3 点に特徴をまとめることができる。

- ・語学クラスにもかかわらず、受講生が多い（40 名を超えるクラスも）
- ・受講生間の日本語力の差が激しい
- ・従来に比して、留学生全般の日本語力が低下している

上記 3 点については、成績評価の分布が証左となるだろう。この点について、もっとも特徴的に表していたのは「日本語文章表現（配当年次：1 年）」である。

左図に示す通り、「秀」が全くおらず、一方で「可」が 46%を占めている。半数近くが辛うじて学位取得したという状況であり、従来のカリキュラムにそぐわない学生を数多く迎えていたことがわかる。またこのクラスは受講生数が 37 名と多く、個別対応にも限界があっただろう。

2 年生科目「日本語口頭表現」でも「可」が 1 割を超えている。このクラスには、春学期に 3 年次編転入学した学生が含まれる。これは日本語力が乏しいことから受講するよう指示したものであつたが、これらの学生は 2 年生に比しても日本語力が低かった。

受講生数と日本語力の差については、09 秋学期よりクラス増設とプレースメントテストに基づくクラス分け（配当年次の枠内において）を実施しており、大きく改善が図られている。さらに 10 春学期には 2 年次科目を分割する予定である。後述のコース専門科目の問題も踏まえ、完全レベル別クラス設定導入の可能性も視野に検討していきたい。

< コース専門科目 >

283 名が回答したが、各設問で「3」「4」「5」を回答した学生は 30 名前後（問 11「私は、この授業によって学習意欲が喚起された」では 45 名）、全体の 1 割を超える。語学以上に不満を感じる学生の多いことが分かる。

個々の授業の問題点について言及することは（担当の多くが非常勤講師のため）できないが、問 5「授業担当者の教え方は適切だった」、問 6「授業内容は分かりやすかった」、問 7「授業の進度は適切だった」に関しては、学習者自身の日本語力も要因の一つとなるだろう。3 年生であっても講義を受けられるだけの日本語力を持たない学生が少なくない（この点については、学生本人から相談を受けたことも

度々あった）。編転入学の基準整備を進めることはもちろんだが、専門科目担当者にも日本人学生ではなく留学生を対象とする授業であることを改めて認識し、配慮を求めることが現実的な対策の一つとし

て必要であろう。

また現在、日本語コース専門科目は、卒業条件を満たすためにほぼすべてを履修する必要があり、事実上選択の余地がない。問1「私は、自主的かつ意欲的に取り組んで、この授業を受けた」で8割以上が「そう思う」と答えていることは驚くべき結果であった。選択の余地が生まれない限りは、時間割でも他の科目と重複しないよう配慮することが求められる。これは、完全レベル別クラス設定導入の障害の一つにもなるであろう。

また選択の余地がないために受講する学生が集中し、講義とはいえ受講生が100名を超える授業もある。演習クラスであっても同様であり、講義形態にせざるを得ないと耳にしている。

高度に安定した日本語力を有する学生のみを対象とすることができない以上、コース別専門科目にも専門性をめぐってグレードを付け、タスクなどにも配慮するなどして、日本語力に応じた選択の幅を設けることが望ましい。

<日本語教員養成>

43名が回答しているが、満足度(問12)で「そう思う」が7割を切っている。また学習意欲についても喚起されたと回答したのが65.1%と非常に低い。「授業担当者の授業に対する熱意」(問8、「1」回答率74.4%)や「質問や相談をしやすい環境・雰囲気作り」(問9、「1」回答率74.4%)などは改善を心がけたい。

ただし日本語教師としての資格を認彦することを考えれば、授業内容を簡略にしたり、進度を遅くしたりすることはできないだろう。意欲的に取り組むことのできない学生(問1、「3」「4」「5」回答率は計23.3%)を切り捨てることになっても、授業の質は維持しなければならない(実際に「日本語教育学概論」で5名、「日本語教授法Ⅰ」で1名の学生が放棄している)。3年間28単位の長期に及ぶ講座であるため、学生にも相応の覚悟を促したい。

2010年度より「日本語学概論」も教員養成受講者は新居田教授担当となり、必修科目はすべて専任教員で運営していくことになる。担当教員間での連携を一層密にし、目に見える形で改善を目指したい。

8 較社会文化コース、教養科目、共通専門科目

・教養科目

教養科目全体としては、授業内容などについて以下のような結果が見られた。

問1「自主的かつ意欲的に授業を受けた」76.4%（1140人中871人）

問6「授業内容はわかりやすかった」75.6%（1140人中862人）

問12「この授業は満足できるものだった」72.2%（1120人中673人）

*上記の数字はすべて各問における選択肢1（そう思う）、2（どちらかといえばそう思う）の計である。

これらの結果や、ここには示さなかった他の回答から見ても、7割強の受講者は教養科目を意欲的に受講し、授業内容を理解し、興味や関心を深めていると見られる。これらの数字は昨年度よりも7~8%高くなっている。

しかし、以下に示すように、いずれも比較的少数ではあるが気になる回答もある。

問2「授業を履修する際シラバスを読んで、あらかじめ何を学習するかを理解した」

10.1%（1138人中115人）

問11「この授業によって学習意欲が喚起された」12.8%（1139人中145人）

*上記の数字はすべて各問における選択肢5（そう思わない）、4（どちらかといえばそう思わない）の計である。

この結果を見ると、受講者たちの1割ほどは教養科目受講への関心が低く、意欲をもてないようである。この数字は昨年とほぼ同様である。

・共通専門科目

共通専門科目全体としては、以下のような結果が見られた。

問1「自主的かつ意欲的に授業を受けた」65.5%（206人中135人）

問6「授業内容はわかりやすかった」68.4%（206人中141人）

問12「この授業は満足できるものだった」65.9%（205人中135人）

*上記の数字はすべて各問における選択肢1（そう思う）、2（どちらかといえばそう思う）の計である。

これらの結果や、ここには示さなかった他の回答から見ても、7割弱の受講者は共通専門科目を意欲的に受講し、授業内容を理解し、興味や関心を深めていると見られる。前述の教養科目と比べると、若干低い数値が出ているものの、おおむね学生たちは意欲的に受講しているようである。これらの数字は昨年より7~8%低くなっている。

しかし、以下に示すように、いずれも比較的少数ではあるが気になる回答もある。

問2「授業を履修する際シラバスを読んで、あらかじめ何を学習するかを理解した」

14.6%（206人中30人）

問11「この授業によって学習意欲が喚起された」10.2%（206人中21人）

*上記の数字はすべて各問における選択肢5（そう思わない）、4（どちらかといえばそう思わない）の計

である。

この結果を見ると、受講者たちの 1 割ほどは共通専門科目受講への関心が低く、意欲をもてないでいるようである。教養科目と同じく、全体の 1 割は学習意欲の低い学生がいるということかもしれない。この数字は昨年より 6~7%高くなっている。

・コース別専門科目

コース別専門科目全体については、以下のような結果が見られた。

問 1 「自主的かつ意欲的に授業を受けた」 90.8% (65 人中 59 人)

問 6 「授業内容はわかりやすかった」 90.8% (65 人中 59 人)

問 12 「この授業は満足できるものだった」 89.3% (65 人中 58 人)

* 上記の数字はすべて各問における選択肢 1 (そう思う)、2 (どちらかといえばそう思う) の計である。

これらの結果や、ここには示さなかった他の回答から見ても、ほぼ 9 割の受講者はコース別専門科目を意欲的に受講し、授業内容を理解し、興味や関心を深めていると見られる。専門科目ということで、教養科目、共通専門科目に比べて学生達の意欲が高いのは当然かもしれない。これらの数字は昨年とほぼ同様である。

しかし、以下に示すように、いずれも少数ではあるが気になる回答もある。

問 2 「授業を履修する際シラバスを読んで、あらかじめ何を学習するかを理解した」

13.8% (65 人中 9 人)

問 11 「この授業によって学習意欲が喚起された」 12.3% (65 人中 8 人)

* 上記の数字はすべて各問における選択肢 3 (どちらともいえない)、4 (そう思わない) の計である。

この結果を見ると、受講者達の 1 割強はコース別専門科目受講への関心があまり高くなく、意欲をもてないでいるようである。今回は比較社会文化コース所属の学生 7 名以外に留学生を中心として多くの他コースの学生達が受講しているので、授業に満足していない者も一定程度見られるようだ。今後の授業において、他コースの学生も視野に入れたコース別専門科目担当教員の適切な取り組みが求められよう。この数字は昨年より 5%ほど高くなっている。

以上のように教養科目、共通科目、コース別専門科目の全体として学生の意欲や満足度はますます高いとは言えよう。しかし、意欲や関心が高くない受講者たちが一定数は見られるということについて、学生の側と担当教員の側の両面において、どのような要因によるのかを把握する必要がある。

さしあたり担当教員の側で対応できる方策としては、教材の量、難易度、授業内容の質、量などの改善があげられる。要するに、学生の学力や理解度には個人差があるので、これをどう把握、対応し、全体として学生の意欲や理解度を高めるかという点に今後工夫が求められるのではないだろうか。また、比較社会文化コースの科目については、今年度は特に留学生を中心として他コースからの受講者が増えたことが、やや関心の低い者の増加につながっているように見受けられる。今後、コースとして、他コース

学生を取り入れた授業への工夫が求められる。